特集

定説を覆す大発見！
上御殿遺跡出土 短剣鋳型

安曇川町の上御殿遺跡で、柄の先に2つの環が付いた「双環柄頭短剣」の鋳型が出土しました。

この鋳型から復元された短剣は、柄と剣身が一体で、柄頭に双環を持つなど、春秋戦国時代（紀元前770年～221年）の中国北方地域で使われていた「オルドス式銅剣」の特徴を持っています。しかし、オルドス式銅剣は、日本国内のみならず朝鮮半島でも出土例がないことから、朝鮮半島を通じて伝わったとされる銅剣の伝達ルートの定説に、一石を投じる大発見として注目を集めています。

上空から見る上御殿遺跡
（毎日新聞社提供）

【発見された2個一組の鋳型】

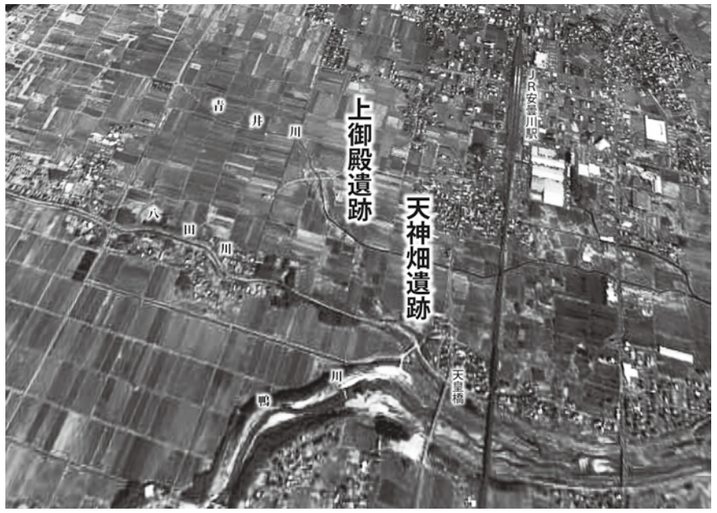
鋳型（出土時下）
長さ約29.5cm、幅約8.8cm、厚さ

鋳型（出土時上）
鋳型（下）約4.4cm、
鋳型（上）約3.6cm

古代・中世の新資料が続々出現

安曇川町を流れる青井川の河川改修工事に伴い、青井川沿いにある上御殿遺跡（三尾里地先）と天神畑遺跡（鴨地先）の埋蔵文化財発掘調査が、平成20年度から公益財団法人滋賀県文化財保護協会によって行われてきました。

同遺跡群では、これまでに中世の「こけら経」や「馬具」をはじめ、古墳時代の「大壁造り建物」・「木棺墓」・「石釧」などとともに、奈良・平安時代の「水辺の祭祀跡」などが、続々と発見され、その都度現地説明会が開催され、高島の古代・中世の姿が新しい資料の出現とともに大きな話題となりました。



今年の調査では、奈良時代から平安時代にかけての木製人形代が51点、馬形代が23点出土しました。人形代は県内2番目、馬形代は県内1番目の出土数です。

発見時の一コマ

これはすごい!!
今まで日本では見たことがない短剣の鋳型

公益財団法人滋賀県文化財保護協会
中村　健二さん

鋳型に彫り込まれた環と刃の一部が見えた瞬間、「え!!」、「これはすごい!!」と思わず声を上げました。もしかして、写真でしか見たことのない中国の青銅器の鋳型か。

高島市シルバー人材センターから派遣された作業員さんが、鋳型の先端を掘りだした時、立派な砥石が出てきたぐらいの印象でした。彫り込まれた短剣の環と刃が見えた瞬間、急いで写真を撮影して、図面を作成しないといけないと思い、他の穴を調査している調査補助員さんを呼んで来て精査し、写真・図面を取り終えました。いよいよ重なっている鋳型の上側を取ると、日本では見たことのない双環の短剣の彫り込みが姿を現しました。すぐに、関係各所に連絡。最高に興奮した声で電話連絡したことが今でも蘇ります。

鋳型に彫り込まれた短剣に似たものを探せば、オルドス式短剣が最も近いのですが、日本風に手を加えられており、今後の研究でこの鋳型がいつ、どこからの影響で作られ、この地に置かれたか解明できればと考えています。